

「阿波おどり」における踊りの変容
-1929年から2017年を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20257

2019年1月25日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 情報コミュニケーション学部 専任准教授

氏名 波照間 永子 (印)

(副査) 情報コミュニケーション学部 専任教授

氏名 須田 努 (印)

(副査) 日本大学 芸術学部 専任教授

氏名 小林 直弥 (印)

1 論文提出者 小林 敦子

2 論文題名 「阿波おどり」における踊りの変容
—1929年から2017年を中心に—

Changes in the Dance of Awa Odori

—A Focus on 1929 to 2017—

3 論文の構成

本学位請求論文(以下 本論文と記載)は次の4章で構成される。各章の主な内容と構成は次の通りである。

各章の主な内容

第I章 序章

「阿波おどり」の概要、研究の目的、先行研究における本研究の位置付け、研究の方法が記されている。

第II章 「ゾメキオドリ」から「阿波おどり」へ

観光政策が実施される以前、「ゾメキオドリ」と呼ばれた時代の特徴、観光政策の内容、現代の「阿波おどり」の特徴を、他の主要な民俗舞踊との比較から論じている。

第III章 「阿波おどり」における踊りの変容過程

男女差が希薄で自由な乱舞であった「阿波おどり」が様式化された統一的群舞に変容する過程を、「様式化」「動作の統一化」「本格的フォーメーションの導入」の3つの指標により分析し、さらにその要因を考察している。

第IV章 結論

第III章で詳しく論じた内容を要約した上で、3つの指標が相互に影響しあいながら、統一的群舞となったこと、主たる要因は観光政策とメディアの発達であり、実践者達の活動の中から影響力の大きいものが潮流となり「阿波おどり」全体の変容につながったと結論付けている。

構成

第I章 序章

- I-1 研究の目的 ---4
- I-2 研究の背景 ---6
 - I-2-1 近代の日本における民俗芸能に対する政策と視線の変遷 ---6
 - I-2-2 「阿波おどり」への影響 ---11
- I-3 先行研究と本研究の位置づけ ---14
 - I-3-1 民俗芸能に関する研究動向と課題 ---14
 - I-3-2 舞踊人類学の研究動向と本研究の位置づけ ---18
- I-4 研究の方法 ---20

第II章 「ゾメキオドリ」から「阿波おどり」へ

- II-1 「ぞめき」と「ゾメキオドリ」 ---27
 - II-1-1 「ぞめき」の多義性 ---27
 - II-1-2 「ぞめき」の由来 ---31
 - II-1-3 「ゾメキオドリ」の特徴 ---33
- II-2 観光政策による変化 ---37
 - II-2-1 観光政策の開始（昭和初期） ---37
 - II-2-2 観光政策による変化（戦後-現在） ---38
 - II-2-3 ラジオおよびテレビ放送の影響 ---43
- II-3 現代の「阿波おどり」の特徴 ---46
 - II-3-1 現代の「阿波おどり」の音楽と踊り ---46
 - II-3-2 「阿波おどり」の徳島県内の盆踊りにおける位置づけ ---54
 - II-3-3 「阿波おどり」と「郡上おどり」および「西馬音内盆踊り」の比較 ---55
 - II-3-4 「よさこい」系祭りとの比較 ---56
 - II-3-5 「阿波おどり」のリズムの特徴 ---58
 - II-3-6 「阿波おどり」における音楽の変容 ---60

第III章 「阿波おどり」における踊りの変容過程

- III-1 分析の方法 ---62
- III-2 「津田の盆（ぼに）踊り」との比較分析 ---63
- III-3 様式化 ---65
 - III-3-1 「女踊り」および「男踊り」の確立 ---65
 - III-3-1-1 「女踊り」という様式名が登場するまで ---66

III-3-1-2 足運びの変遷	---67
III-3-1-3 「女踊り」が確立した要因	---72
III-3-1-4 女性の踊り手における被写体としての意識	---75
III-3-2 「女ハッピ踊り」の台頭	---76
III-3-2-1 「女ハッピ踊り」の登場とその要因	---76
III-3-2-2 「女ハッピ踊り」の前景化	---80
III-3-2-3 「女ハッピ踊り」確立の経緯と要因	---81
III-3-2-4 「女ハッピ踊り」が表象するもの	---82
III-3-2-5 「女ハッピ踊り」のバリエーション	---83
III-4 動作の変遷と統一化	---86
III-4-1 「女踊り」における動作の変遷と統一化	---86
III-4-1-1 「女踊り」における動作の統一化	---87
III-4-1-2 「女踊り」の上肢動作の変遷	---88
III-4-1-3 1980年代の「女踊り」の改革	---92
III-4-2 「男踊り」における動作の統一化	---95
III-5 フォーメーションの導入	---97
III-5-1 フォーメーションの萌芽と一般化（1950-1970年代）	---97
III-5-2 映像に見られる「本格的フォーメーション」（1980年代）	---98
III-5-3 「本格的フォーメーション」の嚆矢	---105
III-6 踊りの変容のまとめ	---108

第IV章 結論 ---109

謝辞 ---112

引用資料 ---114

本研究における「阿波おどり」の集団 ---131

表・図・写真・静止画像---132

4 論文の概要

「阿波おどり」は徳島市で藩政期より盆の時期に行われている。1929年から観光政策が開始され、戦後は急速に隆盛し、年間130万人もの観光客が訪れる。演舞場や舞台ホールにおいて、連と呼ばれる集団により演じられ、各連は踊り手と和楽器奏者から構成される。元来は三味線単独による即興性の高い音楽に合わせた自由な踊りであったが、現在は多種の和楽器による調律された合奏音楽にあわせて、緻密に構成されたフォーメーションと演出をほどこした統一的群舞に変容している。

本論文は、「阿波おどり」における踊りの変容を、舞踊人類学的手法を用いて考察したもので、観光政策の下、審査場が設けられた1929年から2017年に至るまでの「阿波おどり」の変容の過程を、「様式化」「動作の統一化」「『本格的フォーメーション』の導入」という3つの指標により分析している。以下にその結果を記す。

(1) 様式化：「女踊り」「男踊り」「女ハッピー踊り」の成立

「阿波おどり」の原形と称される「津田の盆踊り」（徳島市東部沿岸 津田・新浜地区に伝わる）との比較を行い、男女差の希薄な足運びから、男性は外輪、女性は内輪という男女差が明確な足運びに変容したことを下肢の動作分析に基づいて示す。とりわけ、女性が内輪になった過程について、雑誌や新聞に記された「阿波おどり」に関する言説、写真、映像（映画・NHK放送番組アーカイブス）よりたどり、女性の足運びが下駄の爪先立ちの内輪へと 1960 年代に変化したことを明らかにした。その要因には、女性の踊り手に女性らしさやセクシュアリティを求める視線がメディアによってもたらされたこと、カメラの普及により足元がクローズアップされ撮影されたこと、また、踊り手自身もそれを引き受け被写体として自己を意識し、女性らしい所作を意図的に創出したと考察する。これにより「女踊り」というスタイルが生まれ、これとの対比として「男踊り」も確立した。さらに、女性が太腿を露出することのタブーが希薄になった 1960 年代後半、男装して「男踊り」を踊る女性が登場し、特に短パンにハッピーを着て「男踊り」を踊る形式が「女ハッピー踊り」として確立した。「女ハッピー踊り」では、「男踊り」と「女踊り」の特徴を組み合わせ、様々なバリエーションが連により生じている。女性の踊り手にみる群舞としての美と、各連のオリジナリティの追求が多様性を生みだしたと考察した。

(2) 動作の統一化

1964 年、屋内の公演が開始されたのを機に、舞台芸能としての洗練さが求められるようになった。「女踊り」の動作が、最初は足運びをはじめとする下肢に統一化が図られ、後に上肢も整然と揃えることが要求された。下駄の爪先立ちにおいては支持脚だけでなく遊脚（上げる脚）の高さや角度を、上肢においても挙上する位置や手指の動きなど、微細な点に至るまで厳格な様式が創られた。「女踊り」に次いで「男踊り」も揃えられる傾向にあるが、「女踊り」よりは自由性が保持されており、本来の自由な乱舞であった踊りの特徴を、「男踊り」に残そうと意図したのではないかと考察する。

(3) 本格的フォーメーションの導入

さらに 1980 年代になると、「女踊り」のある名手の考案により、フォーメーションの工夫が図られた。踊り手の舞台上での立ち位置、移動の軌跡、タイミングを、足運びの方向と歩数から決定し、あるフォーメーションから次のフォーメーションへと整然と移動する手法であり、マーチングバンドのフォーメーションにヒントを得たとのことである。この手法が他の連に広まり、現在のような統一的群舞が確立したことを、当事者へのインタビューと文献資料から明らかにした。

この 3 点の変容の要因は、先に記した要因の他に、「阿波おどり」の各連が一堂に会し演舞することで、観客に各連を比較する視点が形成されたこと、コンクールや選抜大会の実施により、技量の優劣や独自性が審査されるため演じ手に競争意識が醸成されたこと等もあると推察する。

5 論文の特質

本論文は、著者が博士前期課程入学時より 7 年間、継続して取り組んできたテーマである。「阿波おどり」の芸能、とりわけ舞踊に着目し、それが観光政策やメディアの発達等の影響を受け変容したプロセスを構築主義の立場から丁寧に論じている。

もともと自由な乱舞と称されていた踊りが、「様式化」「統一化」「本格的なフォーメーションの導入」へと意図的・創造的に展開してきた過程を、文献調査・フィールド調査・「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」採択による映像資料の分析に基づき実証的に考察している。

従来、民俗舞踊および民俗芸能の研究は、信仰や宗教との関わりや、伴奏音楽の特性、当事者の舞踊・芸能にみるアイデンティティの問題など、民俗学、人類学、音楽学の領域に多くの蓄積があるが、舞踊そのものに着目した研究は少ない。

「阿波おどり」においては、特定の時期の踊りの内容に着目した散発的・断片的な研究の報告はあるが、本論文のようにその芸態が変容・創造されていく流れを追ったものは皆無である。加えて、変容の要因を、メディアの発達や国の政策等とからめて考察している点も、従来の舞踊学にはない視点であり、情報コミュニケーション研究科にて研鑽を積んだ成果が認められる。

6 論文の評価

本論文は、「阿波おどり」が現在のスタイルを確立するに至った過程を、舞踊人類学的手法により考察している。舞踊動作の分析結果を軸として、観光政策による踊る場の変化、観客の視点の変化、踊り手と観客の関係性の変化、演じる集団間の競合関係の成立、メディアの発達等の多様な要因が重層的に絡み合っ変容に至ったことを明らかにした点に独創性が認められ高く評価できる。

なお、本論文を構成する各章の内容は、舞踊学および人類学関連の学会にて査読を受け、4本採択されたことを付記する。

7 論文の判定

本学位請求論文は、情報コミュニケーション研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（情報コミュニケーション学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上